

訃報



■島 一先生(立命館大学文学部教授)は、2010年8月10日にご逝去されました。

島先生は、昭和23(1948)年のお生まれで、昭和45(1970)年に東北大学文学部哲学科を御卒業後、引き続き同大学大学院において中国哲学を研究され、昭和53(1978)年から三年間東北大学文学部の助手を勤められた後、昭和56(1981)年4月に本学助教授として赴任されました。先生は、特に中国唐代思想の研究においてすぐれた成果を挙げられ、主要論文には「啖・趙・陸らの春秋学とその周辺」、「中唐期における天人論とその背景」、「『孝経』注疏とその周辺」などがあります。

また教育においては、長きにわたって立命館大学の中国哲学教育の中心的な役割を担われる一方で、文学部において中国思想をテーマにしたゼミを担当するなど、多くの学生教育にご尽力いただきました。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

<在職期間 1981年4月～2010年8月>

同窓会の情報をお寄せください

文学部校友会では、専攻の同窓会や、ゼミの同窓会、同級生の同窓会等の開催報告を文学部校友会ホームページに掲載していきたいと考えております。文学部校友会ホームページに同窓会報告の掲載を希望される場合は、

文学部事務室(電話番号:075-465-8187)

までお問い合わせください。

2012年3月に退職される教員のお知らせ

文学部に着任以来、長きにわたって教育・研究ならびに大学運営にご尽力頂きました下記の先生方が2012年3月31日をもって定年を迎えられます。退職記念講義が行われる場合は文学部校友会HPでお知らせしますので、ご確認ください。

<2012年3月 ご退職>

日下部 吉信先生	哲学専攻	教授	1979年4月着任
服部 健二先生	哲学専攻	教授	1981年4月着任
彦坂 佳宣先生	日本文学専攻	教授	1986年4月着任
杉橋 隆夫先生	日本史学専攻	教授	1977年4月着任

★立命館大学文学部校友会ホームページ

<http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/cg/lt/koyu/index.html>

立命館京都文化講座 「京都に学ぶ」ブックレット第2期 第6巻「京の地宝と考古学」 第7巻「京の公家と武家」の販売のお知らせ

2007・2008年度の2年間、立命館大学文学部では立命館東京キャンパス内で「立命館京都文化講座」を開講しました。この講座の講義録は手に取りやすく読みやすいブックレット「立命館京都文化講座『京都に学ぶ』」シリーズとして全国書店にて発売中です。このたび、新たに第2期(2008年度の講義分)4冊シリーズから第5巻「京の風土と景観」に続いて、第6巻「京の地宝と考古学」、第7巻「京の公家と武家」を発行いたしました。第6巻では、京都の地下に眠るさまざまな時代の遺跡や遺物を通じて、それらの「遺物」が語りかけてくる京都の歴史に焦点を当てています。また7巻では、平安時代から昭和にいたるまでの日本史の主流を彩り、京都の政治世界を支配した朝廷・公家と武家について、多方面から考察を試みています。一読していただければ、従来の観光都市京都とはまた別の京都の顔に、深く魅了されることでしょう。



2009年春に発行しました第1期の第1巻から第4巻(「第1巻 京の色彩(いろどり)」、「第2巻 京の乱」、「第3巻 京の荘厳と雅」、「第4巻 京の生活(くらし)」)は、オリジナル和柄ケース入り4冊セットとして本学インターネット通信販売限定でご購入いただけます。贈り物にもぜひご利用ください。校友会会員価格(各巻700円)で提供しています。



■インターネット販売はこちら

<http://www.ritsumeit-shop.com/>

■お電話でのお申し込みの場合は、文学部事務室(075-465-8187)までお問い合わせください。

立命館大学文学部校友会会報

LETTERS

Colleges of letters



Vol.3

November 2011

CONTENTS

- 02 ご挨拶
文学部校友会長代行 副会長 志田 穰
文学部長 桂島 宣弘
- 03 文学部校友会活動報告
- 05 立命館創始140年
学園創立110周年記念企画
「京都学連続講座～京の伝統と
歴史文化への誘い」開催報告
- 07 専攻・プログラムの近況
- 15 特集① 文学部校友の「いま」
塩野 高弘さん
- 16 特集② 私の学生時代
日本史学専攻 小関 素明教授
- 17 特集③ 学生の活躍
言語コミュニケーションプログラム
朝尾 幸次郎教授
- 18 西川富雄文学部校友会会長
偲ぶ会
- 18 専攻同窓会の開催報告
- 19 お知らせとご案内

立命館大学文学部校友会会報

LETTERS

Vol.3
November 2011

ご挨拶

立命館大学文学部校友会長代行
副会長 志田 穰



文学部校友会長西川富雄先生が2010年7月7日にご逝去されましたから、会長職務の代行を務めてまいりました副会長の志田穰です。

今年3月11日に起こりました東日本大震災は、多くの尊い命を奪い去り、家屋や地域社会そのものを崩壊させてしまいました。そして東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射線汚染を引き起こすという、日本の社会や国民生活を根幹から揺るがす大惨事となっていました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

さて、震災から半年を経た今、壊滅的な被害を被った被災地で、もう一度自分たちの手で故郷を再生するために立ち上がった人々がおられます。また被災地の人々のため、何か自分たちが出来ることはないかとの思いで駆けつける若者たちがいます。そうした話を聞くと、私は胸に熱いものがこみ上げてくるのを禁じえません。その人々が立命館大学校友であったとき、立命館大学の学生であったとき、私は校友の一員としてまことに嬉しく、また誇らしくも思うのです。立命館大学の名のもとにこうした絆を感じられること、これこそが校友会活動の原動力なのでしょう。

文学部校友会は、2007年6月に発足以来、4年目を迎えました。その間、校友会総会、そして2010年度には立命館大学創始110周年行事、ホームカミングデーなどを行い、文学部校友の皆様の交流と結集をすすめてまいりました。少しずつではありますが、校友会としての機能を整えつつあります。今後も文学部校友の皆様とともに、さまざまな活動に取り組み、絆を深めて参りたいと存じます。

今までに寄せていただきましたご厚意に深く感謝いたしますとともに、より一層ご支援・ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

立命館大学文学部長
桂島 宣弘



最初に、今年3月11日に勃発した東日本大震災で被災された方々に心からのお見舞いを申し上げたいと思います。また、この大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、その親族の方々に対しては、衷心からお悔やみを申し上げます。

立命館大学、さらに校友会の全組織は、この大震災を重く受けとめ、その復興のために出来るかぎりのことをする決意です。文学部校友会としても、震災からの復興事業に協力するために、ことに被災地から本学に進学した100名程度の学生・院生の支援のために、全力で協力していきたいと考えておりますので、校友の皆様方のご理解・ご支援を賜れば幸甚に存じます。

さて、1927年に創設された文学部は、2012年には創設85周年を迎えます。この記念すべき年に、文学部はカリキュラムと組織の大改革を実施します。詳しくは立命館大学文学部のホームページを参照頂きたいと思いますが、文学部組織は、それまでの1学科14専攻から8学域18専攻に生まれ変わることになります。新たに生まれる専攻としては、日本文化情報学専攻、考古学・文化遺産専攻、現代東アジア言語・文化専攻、地域観光学専攻があります。また、これまでの専攻もそれぞれ内容を大幅にリフレッシュし、現代社会にふさわしい人文学を他に先駆けて打ち出していくことになります。この改革では、専攻への所属を2回生からとし、1回生時に高校から大学への接続教育を強化することに、最大のねらいがあります。これらの改革によって、人文学を次の世代にバトンタッチしていくシステムが一層整備されるものと確信していますが、まだまだ不十分な点も多いと思います。今後も校友の皆様方のご指導・ご教示をお寄せ頂ければ幸いです。

文学部校友会は、2012年に設立されて5年目を迎えます。まだまだその活動は不十分なものではありませんが、各校友と文学部を結ぶ緊密なネットワークの構築のために奮闘していく所存です。ことに、昨今の厳しい就職状況の中で、後輩学生のためには皆様方の情報やご支援は貴重なものと考えておりますので、校友各位のますますのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

決算について

2010年度立命館大学文学部会校友会決算書				
(会計期間： 2010年6月1日～2011年5月31日)				
項 目		2010年度 予算額(円)	2010年度 決算額(円)	備 考
収入の部	前年度繰越金	25,212,269	25,212,269	
	会費 (卒業生・教職員)	100,000	110,000	教員2名、卒業生9名
	会費 (2010年度卒業生)	9,870,000	11,210,000	文学部校友会費 2010年度1121名
	雑収入	10,000	89,566	普通預金利息(5,566円、 HCD非会員懇親会費84,000円)
	合計	35,192,269	36,621,835	
支出の部	会報発行	1,700,000	1,319,682	原稿依頼・印刷費・送料
	シンポジウム等 印刷費	400,000	0	ホームカミングデー案内 発送
	入会記念品	3,000,000	2,171,004	卒業記念品(2010年度前期、2010年度後期) 会員証作成用文具
	ホームページ 開設・運営	100,000	0	委託費
	学生・大学院生 支援	250,000	10,000	文学部ゼミナール大会校友会長賞
	校友大会派遣	50,000	0	
	総会開催関係	100,000	442,320	ホームカミングデー文学部懇親会関連
	運営関係	900,000	748,760	人件費、通信費、会議弁当代、 西川先生を偲ぶ会関連
	支出予備費	28,692,269	31,930,069	次年度繰越金
	合計	35,192,269	36,621,835	
校友会資産残高(2011年5月31日現在)				
京都銀行		31,917,881		
現金		12,188		
次年度繰越金		31,930,069		

卒業記念品



2010年度日本史学専攻卒業
齊藤 陽子 さん
卒業後は、立命館大学大学院
文学研究科日本史学専修に進学

大学生活はこれまでの人生の中でも、様々な人々と出会い多くの経験を積んだ日々でした。とりわけ、ゼミ活動では専門知識を深めたことはもちろん、研究発表やゼミ内でのイベントを通じて、卒業後も続けてゆきたいと思えるような素晴らしい人間関係を築くことが出来ました。さらに卒業記念品ブックレットを頂いたことは、京都は様々な文化や歴史にあふれた地であったことを改めて思い知らせ、そのような土地で充実した大学生活を送ることが出来たことに、ますます深い喜びを噛みしめております。卒業後は、本大学の大学院に進み、卒業論文で見出した問題により深く取り組み、社会に貢献出来る研究成果や人格形成を目指し、校友会の一員として日々努力してゆきたいと考えます。

文学部
「就活応援ウィーク」を開催

2010年11月8日(月)からの一週間、在校生のキャリア形成支援を目的として、文学部「就活応援ウィーク」を開催しました。
初日は、「グループワークで進める『自己分析』+『仕事選び』」というテーマで、グループワーク形式の進路選択セミナーを実施し、(36名が参加しました)2日目は、「文学部出身の講師が語る文学部生に向けた『就職活動のススメ』」というタイトルで、大西純一氏にご講演をいただき(80名が参加しました。3日目から5日目の3日間は、「文学部教員がコーディネートする『内定者との就活懇談会(テーマ:学部の学びと進路選択)』」を開催し、講師には、4回生の内定者だけでなく卒業生にもおいただきました。卒業生の方には、文学部で学び成長し、理想の進路を実現した体験について、自らの就職活動と学生生活を振り返り、お話いただきました。現在のお仕事の様子、学生時代の国内、海外への一人旅で培った知識や経験など、卒業生の具体的な話に在校生は熱心に耳を傾けていました。参加者は3回生を中心に延べ約230名でした。今後も卒業生によるキャリア形成支援企画は継続して実施していきます。

京王観光株式会社 勤務

菊池 勇希 さん

2010年3月 地理学専攻卒業

今回就活ウィークの一環として3回生の学生を中心に自らの就職活動の体験や実際に働いてみて思ったことをお話させていただきました。卒業後にこのように母校に貢献できる機会をいただけて大変うれしく思っております。実際お話をさせていただき、世間では第二の就職氷河期といわれている中でも自らの夢の実現のために日々の勉強に力を入れると共に就職活動に挑もうとしている学生の意気込みを感じることができました。
企業から内定を頂くことは学生生活のゴールの一つかもしれませんが、社会人のスタート地点に立つことでもあります。今回、就職活動を始めたばかりの3回生に向けて、このようなメッセージを伝える機会を頂けたことを、大変うれしく思いました。
今後もこのような在学生に向けて直接メッセージを送る機会があれば、是非参加したいと思います。

文学部「学部の学びと
将来進路セミナー」を開催

2011年4月2日(土)に文学部の全新生を対象とし、10名の文学部卒業生の方お呼びして「文学部の学びと将来進路セミナー～『なりたい自分』になるために～」を開催しました。このセミナーは、学部での学びが社会で役に立つこと、また大学全体の学びに積極的に参加すれば人間的成長に繋がり、確かな進路を実現することを、卒業生のみなさんを通じて新入生に伝えたいという考えのもと企画されました。当日は3会場に分かれ、教員のコーディネートにより、パネルディスカッション形式で卒業生のみなさんから話を伺いました。充実した学生生活を送ることが広義でのキャリア形成の第一歩となることを、卒業生のみなさんが直接、新入生へ語るかけることで、新入生が大学での学びに積極的に参加していく契機となる有意義なセミナーとなりました。

大阪商工会議所 勤務

松枝 千世 さん

2008年3月 国際プログラム卒業

新入生対象将来進路セミナーに参加させていただき、改めて文学部における学問の領域の大きさを実感いたしました。文学部は、幅広い分野の中から選択して学ぶことができ、将来の進路選択においても視野や可能性を広げることができる学部だと思います。私自身、入学当時は国際プログラムを専攻し、外国語を使う企業に就職したい等の夢を描いていました。在学中は語学の勉強とともに、ゼミや授業で観光学や地域学を研究。次第に観光による地域振興に関心が広がり、大阪のまちづくりや観光振興にも取り組んでいる大阪商工会議所を就職先を選びました。文学部での学びのおかげで、新しい領域に関心を抱き現在の就職先とも出会うことができました。よく「文学部生は就職先がないのでは」と質問を受けますが、私も文学部卒で経済団体へ入所しましたし、就職活動で最後にみられるのは、学部ではなく自分自身だと思います。新入生の皆さんには、大学での学びや課外活動に積極的に参加し、新しい発見や関心を通して自己成長やキャリア形成につなげてほしいと願います。

文学部ゼミナール大会
校友会長賞

校友
会長賞

ニュージーランド教育から
見直す日本のゆとり教育



大縄 真紀 さん

国際プログラム2回生

私は2010年度文学部ゼミナール大会で「ニュージーランド教育から見直す日本のゆとり教育」をテーマに発表し、校友会長賞を頂きました。このテーマにした理由は、ニュージーランドで高等学校に通った経験から、日本のゆとり教育の在り方について疑問を持ったからです。ニュージーランドで展開されている教育(学習者中心の教育)では、日本とは違う国家統一試験や選択科目の様な教育制度が存在します。それは、学習者一人一人の個性を大切にし、日本の理想としている「真の」ゆとり教育と言えるものでした。今後の日本の教育改革には、日本と他国の社会体制の差異を踏まえた上で、今以上に海外の教育に目を向け、調査し、日本の教育にどう取り入れるか研究すべきだと言うのが私の提案であります。ゼミナール大会に至るまで、一本の道筋を立てた発表をいかにわかりやすく行えるか試行錯誤し、多くの方々にアドバイスをいただきました。今後も立命館大学の学生としての視点をいかし、教育制度の在り方について研究を続けていくことが大切だと思います。

立命館創始140年・学園創立110周年記念企画 京都学連続講座～「京の伝統と歴史文化への誘い～」開催報告

文学部では、2010年度の立命館創始140年・学園創立110周年を記念して、「京都学連続講座～京の伝統と歴史文化への誘い～」というテーマのもとに、京都学連続講座を開催いたしました。京都とともに歩んで来た立命館学園の歴史・特色をアピールし、その学問的蓄積を地域に還元することを目的としたものです。文学・歴

史・芸術・地域観光などさまざまな視点からみた「京都」を、本学教授陣が講義する全4回シリーズの講座を通じて、多くの地域の方々や本学卒業生の皆様に新たな文学部の学びを体験していただきました。

第一部 9月11日(土) 「京」の審美眼

1. 京都イメージは幻想か —「京都らしさ」を作り上げた源氏物語の周辺— 中本 大(文学部教授)
2. 水上勉と<京都> —「雁の寺」を中心に— 瀧本 和成(文学部教授)

第一回目の講座では、京都の地から生まれた文学をテーマとした講演を行いました。前半は、中本教授が「源氏物語」を中心とした文学作品と「京都」のかかわりについて解説し、「京都らしさ」、



京都のイメージについての考察を述べました。後半は作家・水上勉が、「京都」をどのように描いたか、代表作「雁の寺」や「五番町夕霧楼」などの鑑賞を通じて、瀧本教授が解説を行いました。



第二部 10月9日(土) 「京」の原風景

1. 京都盆地の原風景と平安京 高橋 学(文学部教授)
2. 太秦の地に古代山背の道をたどる 片平 博文(文学部教授)

第二回目は、地理・風土を題材に、前半では高橋教授が現代でも大きな関心がよせられるテーマとして、地震などの自然災害を取り上げ、平安京の自然環境と当時の人々の生活とのかかわりや、京都盆地を地形的に考察する講演を行いました。後半は片平教



授が衣笠キャンパスからもほど近い松尾社から太秦にかけての古代道の痕跡から、平安京時代の京都の風景をさかのぼり、当時の様子の解説を行いました。



第三部 11月6日(土) 「京」の芸術

1. 京都日本画革新の旗手たち —明治・大正期— 島田 康寛(先端総合学術研究科 特別招聘教授)
2. 堂本印象美術館 見学【特別企画展】金鳥桂華の世界 —華鶴大塚美術館所蔵品より—

この回は、京都ゆかりの芸術とりわけ絵画をテーマに、講義と見学の二本立てで企画しました。前半の講義では、島田教授が、圧倒的な西洋化の波と伝統との間で格闘した京都日本画の動向を竹内栖鳳、千種掃雲、土田麦僊、小野竹喬、村上華岳、榊原紫峰



らの革新運動を通じて紹介し、後半には受講生の皆さんに堂本印象美術館の見学へ赴いていただき、特別企画展の金鳥桂華の鮮麗な花鳥画の世界と堂本印象によるさまざまな花や鳥の姿を鑑賞していただきました。



第四部 12月4日(土) 「京」の伝統文化

1. 京のデザイン —西陣織・友禅染図案が語る京都の歴史と美術— 木立 雅朗(文学部教授)
2. 京の「みやび」と室町文化 —京都の近代化をめぐる— 三枝 暁子(文学部准教授)

第四部では、歴史文化を題材とした講演を行いました。前半は木立教授が西陣織・友禅染の図案(デザイン)から考察した近代京都の歴史や美術の造詣についての講演を行いました。後半は三枝准教授が、京都の観光名所である鹿苑寺金閣をはじめとする禅宗寺院に代表される「室町文化」について、明治期以降に展開する日本文化論とからめながら、講演を行いました。

最終回となるこの回では、受講者全員に、記念品として「京都に学ぶ」のブックレットを贈呈させていただきました。

この京都学連続講座では、いずれの回においても受講生とともに「京都に学ぶ」ことを主眼におき、受講生が身近にイメージできる講演内容としました。おかげさまで、本学卒業生をはじめ一般の地域の皆さんを中心に毎回100名を越える参加者を得ることができました。受講生から寄せられたアンケート回答では、「斬新な切り口で京都・歴史の再発見が出来き、色々な見方があることにも気づかされました」、「京都には何度も足を運んでいるが、まだまだ京都について知らないことを多く発見しました」などの声のほか、今後も「京都に学ぶ」シリーズ講演会の開催を希望するとの声を多数頂きました。

また、講座期間中を通じて、2007年・2008年の2年間に立命館

東京キャンパスで開催した「立命館京都文化講座」講義録「京都に学ぶ」シリーズ・ブックレットを紹介させていただきましたが、いずれの回においても多くの受講生の方に購入していただきました。

地域の皆さんをはじめとする受講生の皆さんの「京都」に対する関心の高さや知識の深さを改めて感じさせられるとともに、これまで文学部がすすめてきた人文学からアプローチする「京都学」の成果を、この講演会を通じて多くの皆さんに受け止めていただけたのではないかと考えております。これからも、進化し続ける立命館京都学の成果を、社会に発信し続けていく所存です。



■哲学専攻

加國 尚志 教授

哲学専攻では2011年度をもって、長年にわたって専攻の教学・研究を担ってこられたお二人の先生が退職されます。

日下部吉信教授は、古代ギリシア哲学、とりわけソクラテス以前の哲学の研究者として大きな足跡を残されました。ディールズ＝クランツの資料をもとに『初期ギリシア自然哲学者断片集』（ちくま学芸文庫）全3巻の個人全訳という前人未到のお仕事をされ、大著『ギリシア哲学と主観性』（法政大学出版局）で、ソクラテス、プラトン以降の西洋哲学の歴史を「主観性原理」による原初的な存在の隠蔽として批判する哲学史観を提示されました。

服部健二教授は、フォイエルバッハ、マルクスなどのヘーゲル左派研究をはじめ、フランクフルト学派、日本哲学など、多岐にわたって研究をなさいました。アドルノやホルクハイマーの著作の翻訳をはじめ、『西田哲学と左派の人たち』（こぶし書房）で、西田哲学から出発して独自のマルクス理解を生み出した船山信一らの哲学を再評価する観点を提出され、日本哲学研究に大きな寄与をもたらされました。また、大学行政にもご貢献され、現在、学園副理事長としてもご活躍です。

古典哲学の碩学として、哲学専攻の教育・研究の岩盤を築かれた日下部先生、ヘーゲル左派、西田左派の研究に大きな足跡を残され、立命館の哲学研究の伝統を伝えられた服部先生、お二人の長年のご貢献に御礼を申し上げます。

専攻の重鎮であるお二人のご退職の後、哲学専攻は、「人間研究学域哲学・倫理学専攻」として、新たな出発をいたします。お二人の先生の残された大きなお仕事を、哲学専攻のたいせつな伝統としてしっかりと次世代に引き継ぐとともに、文学部の新たな教学の中で、現代的な哲学と倫理学の新たな教育・研究の方向を目指していくことになります。どうぞ今後とも、ご助言・ご支援をよろしくお願いいたします。

■教育人間学

福原 浩之 教授

この度の東日本大震災で被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。幸い在学生は全員無事との連絡を受けておりますが、被災地出身の卒業生の方々や、被災地付近に居住、または就業されている方々の安否について、専攻関係者一同大変心配いたしております。何か情報がございましたら御一報いただければ幸いです。

さて、専攻の近況をお知らせいたします。最初にご報告したのは、昨年11月に開催された「第4回教育人間学会」についてです。この学会は誕生以来、年毎に「人間形成」「臨床教育」「心理健康」の各領域が大会テーマを決めて担当してきましたが、一巡した昨年度は、専攻の過去の歴史を回顧しながら、あらためて「教育人間学とは何か」を問い直しつつ、将来の展望をおこなうことができました。特に大会のシンポジウムでは、専攻教員をはじめ在学生や院生、そして全国から集まったOB・OGを交えて白熱した議論が繰り広げられました。懇親会でも再会を懐かしむ同窓の輪があちこちに広がり、専攻誕生十周年を記念するクッキーなども配られました。当日にお世話下さった皆さんには、この場を借りて心より御礼を申し上げます。



次に専攻スタッフの近況です。名誉教授の斎藤稔正先生は昨年度で特任教授を終えられ、現在は非常勤として大学院科目をご担当下さっています。林信弘先生は『西田幾多郎の純粹経験』（高菅出版）を出版なさいました。鳶野克己先生は本年3月に文学研究科長の職を終えられ、昨年以上にご研究や学生・大学院生のご指導に専心なさっています。春日井敏之先生はここ数年全学の教務部長として、毎週数多の会議をこなしておられ相変わらずのスーパーマンぶりです。中川吉晴先生は学外研究のため、カナダとタイを訪問され9月末に帰国されました。山本昌輝先生は一年間のウィーン留学からご帰国後は、欧州に精神分析の源流を探る旅をなさるなど、ますます海外にご研究のフィールドを広げられています。私（福原）は過去10年間の疲れを癒しつつ、今後の教育人間学の展開について卒業生と模索中です。

また、助手であった加納友子さんは昨年度から非常勤講師として概論等をご担当です。実習助手の神村有紀さんは療養

中でしたが、後期からはまた元気な顔を見せて下さっています。それでは皆様のますますのご活躍をお祈りいたしております。

■日本文学

中西 健治 教授

日本文学専攻は来る2012年度から日本文学研究学域という大きな括りのもとに2専攻が設けられます。ひとつは日本文学専攻ではほぼ従来通りの教学内容ですが、同時に、日本語学や図書館学、さらには日本文化のさまざまな形—絵画や演劇など—を研究する日本文化情報学専攻を新たに設置します。特に図書館学は本学にとっては専任の教員を置かずにいた分野ですので、今後のこの方面での発展が期待されます。とは言うものの、従来から書物や書誌に関する研究などは作品・作家研究の必須事項でもあり、作品・作家研究と並行して行われてきました。したがって2専攻のカリキュラムはできるだけ垣根を低く設定して、学域全体が日本文学と日本文化とを共に広く学べるように設計されています。

本年度も6月の第2日曜日に日本文学大会が、また7月末に夏期国語教育ゼミナールが開かれ、学部生・院生を中心とした研究例会も年3回、活発に行われています。「論究日本文学」には教員、院生の論文の他、「会員業績」欄には近刊の多くの著作が掲載されています。このように先輩諸氏の活躍に続いて現役の会員も着実に精進を重ねているのが今日の日本文学専攻の姿と言えるでしょう。また今年度から文学研修旅行と称するようになった学会の行事も、今年は7月に岡山・倉敷方面へ研修に行きました。30名近い参加者があり盛会でした。

今年度は学位申請が多くある年度でもあります。甲が8件、乙が2件で、これは近年にない活況ではないかと思われ、それだけに多くの方もこれに続いて欲しいと願っています。ちなみに最近の学位申請の件数は、07年度=7(1)、08年度=4(1)、09年度=3(3)(※注)となっています。着実に研究を進められている方の顕彰をぜひともしたいと考えています。

昨年秋には中古文学会が本学で開かれました。本学の院生や学部生の働きは参加者にずいぶん好印象を与えたようです。アトリサーチセンターでの展示会や堂本印象邸でのお茶会も好評でした。この夏にも国語教育関係の学会である解釈学会が開かれます。学生・院生はもちろんのこと、先生方も母校の発展を期して研究に、教育に精励されています。ぜひともキャンパスをお尋ねください。お待ちしております。 ※()内は乙号



▲近年の会員の刊行図書

■中国文学

芳村 弘道 教授

昨年の夏は、我が専攻には訃報相次ぐ残念な年であった。7月14日に松本幸男先生が享年75歳をもって逝去された。松本先生は御定年前に健康を損なわれ、退職後、10年余の長きにわたって療養に努められたが、薬石効無く、お亡くなりになった。松本先生は、昭和48年に助教授として着任、主に6朝前半期の文学を研究され、著書には『阮籍の生涯と詠懐詩』（木耳社、1977年）、翻訳書『袁枚伝』（アーサー・ウェイリー著、彙文堂書店、1992年）のほか、1022頁からなる研究の集大成『魏晉詩壇の研究』（中国藝文研究会発行、朋友書店発売、1995年）がある。

続いて翌8月10日に島一先生が急逝された。享年62歳であられた。島先生は昭和56年に助教授として着任され、中国思想の分野の講義などを担当された。御専門は先秦思想と唐代思想研究であった。特に唐代思想分野では「春秋学」や道教方面からの研究を開拓し多くの優れた研究成果を示された。研究論文集を世に問おう、と初校まで終えておられたが、御生前の完成に至らず残念であった。中国藝文研究会では、その遺志を継いで先生の遺稿集を来年に出版する予定である。

専攻の研究会・同窓会組織である中国藝文研究会は、昨年も学生参加の中国の文学・歴史遺跡を巡る旅行をおこなった（9月1日～8日）。一昨年に続き河南省を旅したが、洛陽の東の偃師という町に連泊して北宋皇帝八陵をすべて見学し、後漢光武陵、杜預墓、杜甫墓、顔真卿墓、鄭州博物院などに足を運び訪古の楽しみを満喫した。帰途には北京を訪れ長城や故宮、天壇などを見学した。故宮武英殿の文物展観において顔真卿「湖州帖」、范仲淹行書「遊行帖」、陸游「懷成都十韻」、金農

「人物山水画冊」などの希代の名品に接したのは大きな収穫であった。なお今年の旅行地は南京・揚州・鎮江・上海である。

中国文学専攻は、「研究学域」制度などの導入による文学部の改革に伴い、2012年度から「東洋研究学域」に属する専攻となる。古代から近・現代にいたる中国の文学や思想を学ぶという従来の教学内容を堅持し、より充実・発展させてゆきたい。「東洋研究学域」は、中国語や韓国語を学び、2国の現代文化について理解を深める新専攻「現代東アジア言語・文化専攻」および「東洋史専攻」と我が専攻とによって組織される。三専攻の特色を活かし、融合的な学びも可能な環境を整え、発展を期すものである。



■英米文学

丸山 美知代 教授

前回、専攻教員の写真を掲載するとともに専攻の近況報告をしてから二年が過ぎ、今回、その後の専攻について報告をすることになりました。2011年現在、7名(川口、ウェルズ、佐野、中川、丸山の各教授と須藤、竹村の准教授)の体制で学部専攻と大学院・英米文学専修教育に当たっており、学部学生500余名、博士前期課程(早期履修生を含む)6名、博士後期課程3名が学んでいます。それぞれが卒業論文、修士論文、博士論文の完成を目指して日々、励んでいます。昨今の社会情勢のせいで就職決定時期がこれまでよりも遅れていることと、内定を獲得するまでに学生が大変な苦勞を強いられていることが特筆すべきことと言えるでしょう。遠くない将来に状況が好転することを願わずにいられません。

次にお伝えしなければならないのは、マクレーン教授が個人的理由によりこの3月で退職されたことです。2013年度末をもってともに退職する予定であった筆者にはとりわけ大きな衝撃でした。20年以上にわたって専攻教育を支えて下さったことや、



大学院生の修士論文、博士論文など英語論文の執筆に手を貸して下さり、審査委員として主査や副査も勤めてくださったことなど、感謝すべきことは多いのですが、それだけに定年を俟たずに去られたことは返す返すも残念です。

さて来年度からの文学部全体の改変に伴い、英米文学専攻は国際文化学域内の専攻となります。制度的にも、教育実践のうえでも様々な新しい試みや計画が進行中ですが、専攻の教学目標などの基本的スタンスにはあまり変更がないものと考えています。

また写真にあるように、今年7月に専攻主催の立命館英米文学会(昨年20周年を迎えました)が開催されました。写真は評議員で法学部の石原浩澄教授が「ロレンス研究について」という演題で講演されている場面です。このように学会では毎年、機関誌『立命館英米文学』を刊行するとともに、学会では研究発表や講演会などを行っています。また卒業生と新・旧教員が集う機会も設けていますので、一人でも多くの方に学会員としてご参加いただき、英米文学専攻へのご支援をいただきますようお願い申し上げます。

■日本史学

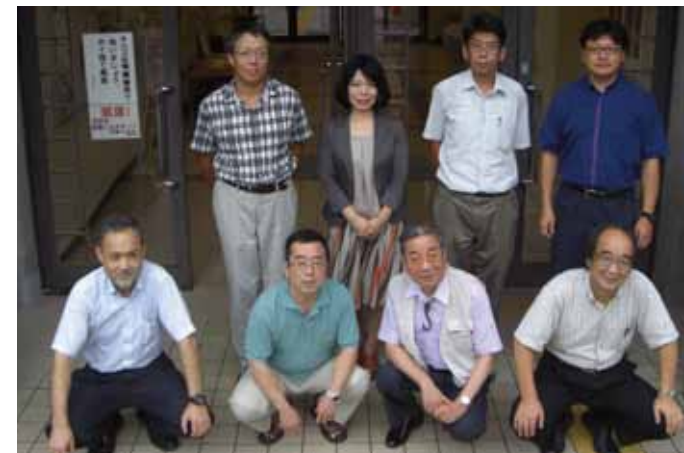
杉橋 隆夫 教授

『立命館大学校友会会報』創刊号に、やや遡った時代から専攻の近況を綴ったのが2009年、昨年は6月に開催されたホームカミングデーにおける専攻企画の様子を報告したから、この間にそう大きな変化があったわけではない。文学部全体に互る改革のなかで、組織上の抜本的な改革が実行されるのは、むしろ来年度からだ。すなわち、現在の日本史学専攻は、日本史研究学域の下に日本史学専攻と考古学・文化遺産専攻とに分割統属することになる。したがって考古学部門を含む日本史学専攻の近況報告としては、今年度が最後になろうから、以下に教員

(含、任期制)の氏名と現在の主な研究テーマ等を列記しておく。もっともインターネット全盛の昨今にあっては、そうした情報は容易に検索・入手可能であり、今さらの感がないではないが、私のように文献史学をもって本旨とする人間には、紙媒体による記録にも捨てがたい魅力とメリットを感じるのである。電子媒体の効率性・利便性に日頃恩恵を蒙りながらも、更新を重ねたデータに一抹の不安が拭い切れない。

まず日本史コース。小関素明(近現代政治史・思想史)、桂島宣弘(17～19世紀の日本のアジア観とアジアの日本観)、杉橋隆夫(中世国家史・法制史)、本郷真紹(古代律令国家・王権と宗教)、山崎有恒(近代化・西欧化をめぐる政治過程)の各教授、佐古愛己(平安貴族社会の研究)、三枝暁子(寺社史料からみた歴史都市京都の社会構造、京都学プログラム兼任)各准教授、李豪潤(近世儒学思想史と政治・外交・自他認識)助教の8名。

考古学コースは、木立雅朗(窯業考古学、京都学プログラム兼任)、高正龍(韓国考古学)、矢野健一(農耕社会の成立に至る



考古学的研究)、和田晴吾(古墳時代史)の各教授と下垣仁志(古墳時代の社会構造)講師の5名。専攻全体で計13名である。左下の写真は内8名と1985年当時の教員・院生懇談の一コマ。

専攻主任は前期は矢野教授、後期は山崎教授、全学役職としては、本郷副総長、桂島文学部長・理事、和田図書館長、小関人文科学研究所長等、諸方に活躍している。

最後に自身に関することがらで恐縮だが、今年度を以て35年間勤めた立命館大学を定年退職となる。私は本学の卒業ではないけれども、文学部校友会には設立当初から入会し(規約第5条2項(3))、このような役割を与えられた。校友会会員に定年はないが、大学・法人に対してと同様に、この機会に衷心よりの謝意を表しておきたい。

■東洋史学

松本 保宣 教授

去る8月28日に東洋史学会大会が衣笠キャンパス末川記念会館第3会議室で開催されました。

プログラムは以下の通りです。

・三浦充喜「毛沢東による曹操再評価の意図を探る—1952年から59年の事例を中心に—」

(本学大学院博士課程前期1回生)

・牛根靖裕「1330年代の元朝とコンギラト部—太禧宗院の置廢にみる文宗朝と文宗皇后監国期のモンゴル高原政策を例として—」(本学大学院文学研究科研究生)

・鷲尾祐子「孫呉竹簡の吏民簿について」(本学文学部非常勤講師)

・井上充幸「平天仙姑小考—黒河中流域における水神信仰の過去と現在—」(本学文学部准教授)

例年通り、大学院生・卒業生・教員の研究発表が行われ、OB・OGが多数参加されました。当会は同窓会的な性格もかねており、懇親会では遠慮のない歓談の場がもたれました。1980年代に故大澤陽典教授の肝いりで始まった当会も30年近く続けることができました。ひとえに、OB・OG・教員・大学院生等関係者各位のご協力のたまものとして、感謝致します。

文学部のHPで告知されていますが、来年度より文学部の改組に伴って、東洋史専攻のあり方も変わっていきます。東洋史専攻は中国文学専攻と共に「東洋研究学域」という単位を構成します。また、東洋史専攻と中国文学専攻の近現代担当の教員に朝鮮史担当の教員を加えて、現代東アジア言語・文化



専攻を新設します。学生は東洋研究学域単位で募集し、一回生は共通の初年次教育を受け、二回生より三専攻に分属します。もっとも、現在の在學生（来年度の二回生以上）は、旧来通りの東洋史・中国文学専攻の枠組みであることは変わりありませんので、当分の間、旧カリキュラムと新カリキュラムの並存が続くことになります。今後、東洋史学会あるいは同窓会的組織をどうするか、皆様方のご意見を賜り検討していきたいと思ひます。いずれにせよ、こうした新体制への移行を契機として東洋史専攻ひいては東洋研究学域の発展に向けて努力したいと思ひます。

■西洋史学

高橋 秀寿 教授

昨年度から、小田内隆、高橋秀寿、米山裕、小林功の計4名の専任教員と特任教授の大戸千之に加えて、助教の宮下敬志が専攻運営に参加することになりました。宮下敬志は西洋史専攻出身者で、アメリカ史専攻で、先住民問題を専門として学界で活躍しています。昨年度は小田内隆が主任を務めていましたが、今年度は前期に国内留学を取得し、研究に専念しました。昨年度『異端者たちの中世ヨーロッパ』をNHKブックスから上梓し、学界でも話題となりました。今年度の専攻主任は高橋秀寿が務めています。米山裕は三年間の文学部副学長を務めた後に、半年の国内留学で研究に専念しましたが、今年度から教学部副部長の役職についています。富山大学から赴任した小林功はもうすっかり立命館大学の雰囲気にも慣れ、学内業務をこなしていく一方で、学生たちとフレンドリーに触れ合いながら、教鞭を取っています。

千葉県で療養されていた末川清先生が今年の11月1日に亡くなりました。夏に入院先で専攻の様子を懐かしむ先生のお顔を拝見することができたので、本当に残念でなりません。瀬原

義生先生は研究意欲が増すばかりで、お元気に研究活動を行ない、たくさんの業績を積み上げています。長田豊臣先生は二期八年の総長を務めあげられたのちに理事長に就任なされました。専攻の日常とはまったく次元の違う朱雀キャンパスの建物で激務をこなしています。

文学部の改革についてはすでにご存じの方も多いと思いますが、来年度より専攻ごとではなく、「学域」と呼ばれる単位で合否判定が行われることになりました。西洋史専攻は英米文学専攻と文化芸術専攻（現在の学際プログラム）とともに「国際文化学域」に所属し、この学域で研究入門を担当することになりますが、西洋史専攻を選択した二回生以後の学生は基本的にはこれまでと同じように西洋史のゼミに所属し、西洋史専攻の学生として卒論を書いて、卒業していきます。四人の教員によるスタッフの構成も変わりませんが、米山裕がコミュニケーション学域の言語コミュニケーション専攻に移り、ロシア近代史を専門とする森永貴子先生が学際プログラムから西洋史専攻の新たなスタッフとして加わることになりました。ただし、専攻に入学した現在の一回生が卒論ゼミを終了するまで、両教員が二つの専攻にまたがってゼミを担当することになります。改革が順調に進むまで専攻内はあわただしい状態がつづくかと思いますが、西洋史専攻のよき伝統だけはしっかりと守っていきたいと思っています。

■地理学

高橋 学 教授

地理学専攻では、今、文学部改革の一端として来年度からスタートする「地域研究学域」の準備作業で追われています。「地域研究学域」は地理学専攻、地域観光学専攻、京都学専攻から構成されます。これらは、従来から長い伝統を持つ地理学専攻、まったく新しくスタートする地域観光学域、それに日本文学、日本史学、そして地理学が共同して運営してきた京都学プログラムという履歴の異にする専攻が一つの「学域」になるため、多くの問題を解決しなければなりません。たとえば、これまで一定の単位を取得し、国土地理院に申請すれば認められた測量士補、あるいはGIS学術士、地域調査士などの資格も、授業の内容まで再チェックされることになっています。

また、各専攻に分かれるのが2回生からであるため、学生の割り振りの手続きも公明正大なものとせざるをえません。なるべく多くの学生が納得して自分の進みたい専攻に所属できることが望ましいことはいうまでもありません。



従来から存在する地理学専攻でも、1回生のリテラシー教育の改変の影響を受けて、「地理学研究入門」、「地理学実習」など主要科目も大幅に改定せざるを得なくなっています。また、「地域研究学域」共通の教科書の作成が進められたり、「地理学研究入門」の教科書も検討が進められたりしています。これまで1回生ははじめからできていた専門教育の開始時期が遅くなることから、科目の精選も大きな課題です。また、地域観光学域では、これまでにない海外実習なども企画されており、その準備に余念がありません。また、京都学専攻はこれまでの京都学プログラムの経験はあるものの、日本文学・日本史学・地理学がそれぞれの分野の利点を活かして「京都」という地域にアプローチするため、乗り越えなければいけない問題も少なくありません。

これまでの専攻制度と比較して、おのおのの壁は低いものとして、新しい研究や教育の試みが始まろうとしています。当分の間は試行錯誤を続けなければならないでしょう。しかし、立命館大学の文学部は、今、大きく変貌しようとしています。「地域研究学域」だけでなく、新しい文学部の斬新な試みに、OB・OGのかたがたに期待していただくとともに、応援を賜れば幸いです。

■心理学

土田 宣明 教授

卒業生の皆様、お元氣でご活躍のことと拝察いたします。文学部校友会報の場をお借りして、心理学専攻の近況をご報告申し上げます。

まず、教員の移動についてご報告します。2011年度より、谷晋二教授が着任されました。ご専門は応用行動分析学でいらっしゃる。大学院は応用人間科学研究科のご所属です。その他、ご所属の先生方の顔写真やご研究内容に関しまして

は、文学部のホームページに掲載されております。ぜひご覧ください(<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/2012/>)。

また、このホームページに紹介されておりますように、2012年度より立命館大学文学部は「学域」制度を実施することになります。心理学専攻は、従来の人文学科心理学専攻から、心理学域心理学専攻と名称を変更することとなります。専攻内では、認知・情報&ヒューマンインターフェース分野、生涯発達&ヒューマンケア分野、人格・社会&ヒューマンダイナミクス分野、行動・環境&ヒューマンサービス分野の「学びの場」を提供することになります。ただ、従来通り、コース等の細分化は行いません。

なお、心理学専攻では、星野教授のご尽力により、心理学専攻ホームページも充実しております。次のところですか(<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/>)。

ここにアクセスしていただき、「専攻生」のところをクリックしていただくと、心理学研究室の「生」の動向がよくお分かりいただけるものと思ひます。

さらに、ここから「基礎実験」のところをクリックしていただくと、今年度開講しているテーマをご覧いただけます。ちなみに今年度は「閾と判断」「パーソナリティ／知能」「古典的条件づけ」「社会的相互作用」「心理量」「概念形成」「オペラント条件づけ」「好悪の尺度化」「系列位置効果」「心的回転」となっています。皆様の在学時とあまり変わらないテーマが並んでいるのではないのでしょうか。心理学専攻で一番「きつい」授業として、今も変わらずに開講しています。2週間に1度のレポートの提出は「しんどい」けれど、懐かしい思い出なのではないのでしょうか。

以上簡単ではございますが、心理学専攻の動向をお知らせしました。なお、2010年度より心理学研究室のある啓明館が耐



▲耐震工事を終えて、新しい外壁ができた啓明館(心理学研究室のある建物)

震工事を実施しておりましたが、それが完成しました。新啓明館の建物の外観写真を掲載させていただきます。

■学際プログラム

崎山 政毅 教授

校友の皆さん。

と、ひとくくりにお呼びしてしまいました。「文学部・人文総合科学インスティテュート」、「文学部・人文総合科学インスティテュート学際プログラム」そして「文学部・学際プログラム」という、この15年の間に名前だけでも大きな変化を遂げてきた、セクションすべての卒業生の皆さん、と正確にはお呼びしなければならないでしょう。

この、いわゆる「インス」あるいは「学際」も、来年度からまたもや変わります。西洋史専攻と英米文学専攻という、ふたつの隣接(しているかな?)専攻と合同して、私たちのセクションは「文学部・国際文化学域・文化芸術専攻」と変わるのです。それだけではありません。新たなメンバーを迎え入れながら——残念、古株は動きませんよ——、まったく新たなスタートを切ることになります。

しかし心配ご無用。これまでの特色であった、多様な専門領域を横断し、さまざまな言葉を用い、伝統的な学問分野をふまえながらもアクチュアルな時代の要請に応えていく(…自分で言っていると何か恥ずかしくなってきましたね)。とにかく「美味しい人文諸学のごった煮」の場たんとすることは変わりません。ごった煮がポトフなのかブイヤベースなのかシチューなのか鍋なのか、味わってみなければわからないところも変わりません。とはいっても、私たちも迫りつつある新しいスタート・ラインを前にして緊張していないわけではありません。それもたんなる制度的な改編・改革という意味にとどまるものでもないのです。

「9月11日」という日付を、事実上の決定的な「画期」として始まったこの世紀は、かつてよりも厳しい問題にあふれています。他者を受け入れない不寛容の強化。種々の次元での暴力の蔓延。うちつづく大災害や大事故。出口の見えない不安が蔓延する、よどんだ時間感覚。そういう絡み合いのただ中に「想定外」という虚言にかざられて起きてしまった「3月11日-フクシマ」という日時と場所とが世界史に醜く刻印されてしまったことは否定しえません。

そのような今・ここを私たちは生きていかなければならない。生き延びていかなければなりません。

非常事態が日常と化してしまったかのごとき、閉塞感をたたえる全体的雰囲気は、それでもなお私たちの「さまざまな潜在可能性」を最後まで奪ってはならず、奪いきることもできないのです。「インス」「学際」そして来年からの「文化芸術専攻」は皆さんにとっての——それは同時に私たちにとって、でもあります——そうした「さまざまな潜在可能性」を探究する場でありたい。そして皆さんにとって——私たちにとって——互いに支えあうことで何度でも還ること／出発することができる場でありつづけたい。私たち教員一同はそう切望してやみません。



■総合プログラム

伊勢 俊彦 教授

本年3月11日に起こった東日本大震災、それが引き金となった福島第一原発の事故によって、校友のみなさまの中にも、ご本人やご家族、ご親戚、お知り合いが被災され、あるいは、直接、間接の影響を被っている方々がおりと思います。心からお見舞い申し上げます。

ヨーロッパの歴史では、18世紀という激動期に、リスボン大地震(1755)という未曾有の自然災害が記録されています。これを含む自然や社会の異変の中で遍歴する青年の姿を一篇の小説に描いたヴォルテールは、結局のところ、災厄から身を守りながら人間らしく生きるには、「われわれの庭を耕さなければならない」、つまり、実直に勤労することであると述べました。

立命館の大学としての特徴も、勤労する人々に開かれた私たちの教育・研究にあり、かつての夜間の課程は、そのことを象徴するものでありました。われわれの総合プログラムは2002年度に発足しましたが、その出発点にあったのは、この夜間の課程から引き継いだ蓄積をどのように生かしていくかという課題でありました。この課題にたいする対応として、総合プログラムが掲げた理念が、複数の視点からの総合的な人文学の追求であったことは、みなさまもご存じのとおりです。この理念は、文学部全



体の改革の中でも役割を果たしてきましたし、来年度から出発する、学域・専攻制という文学部の新しいしくみの中でも生き続けていくことと思います。

さて、来年度からの文学部全体の大きな再編に先立ち、総合プログラムとしては、2008年度に入学した今年度の4回生が最後の学生たちとなります。それぞれ、テーマリサーチゼミナールで卒業論文やさまざまな制作物に、また、厳しい経済・社会情勢の中ではありますが、卒業後の進路を拓く活動にとりくんでおります。

この3月には村島義彦教授がご退職となり、教員の陣容もいささか寂しくなりましたが、主任の伊勢のほか、畑中敏之教授、神藤貴昭准教授が総合プログラム所属となっております。また、これまで総合プログラム所属で、授業等をつうじてみなさまがご存じの教員の多くが、引き続き文学部に在籍されています。校友のみなさまも、さまざまな機会に、ぜひキャンパスを訪れ、立命館大学と文学部の新しい発展に触れていただくと同時に、ご自身の学生時代と同じ、変わらぬ基本的精神を確かめる機会としていただきますようお願いいたします。

■国際プログラム

上田 高弘 教授

国際プログラムを巢立たれた校友の皆さんには今年、とても重要な報告があります。皆さんも社会や家庭の諸場面で活動しながら日々、成長を遂げておられるはず。大学のカリキュラムも同様で、しかもその変化が時にはっきり目に見えるものとなるタイミングがあるのですが、国際プログラムにとっては本年(2011年度)、来年(12年度)と、それが続くのです。

まずは演習の履修方法が変わりました。本プログラムの所属学生はこれまで、衣笠キャンパスの複数学部を横断する国際インスティテュートの学び(国際社会プログラム)を修めながら、

3回生になると学際プログラム開講の演習か、文学部の諸専攻・プログラムの学びを横断するテーマリサーチゼミナールのいずれかを履修していましたが、開設10年目となる今年、2009年度入学者が3回生として登録する演習Iから、エリアスタディ、ツーリズム、宗教、文化、…といった諸テーマに対応できる独自の演習を開設することになりました(テーマリサーチゼミナールを履修するチャンネルは閉じていません)。

カリキュラムをコンピュータのOSにたとえたとき、演習履修方法の改革は、日々のアップグレードを束ねたサービスパックに相当するといえますが、とすればOSそのものの更新(XPから7に乗り換えるような)にもなぞらえることができるのが、2012年度改革です。開設以来70余年の歴史のなかで最大と位置づけ、文学部全体として取り組むこの改革において、国際プログラムは国際コミュニケーション専攻へと名称を変更し、



さらに言語コミュニケーション専攻(現在の言語コミュニケーションプログラム)とともに、入学者受入と初年次教育の枠組みであるコミュニケーション学域を構成します。

同時に、上述の独自演習の開設に結実した現行カリキュラムの一部が、地域観光学専攻(地域研究学域)と現代東アジア言語・文化専攻(東洋研究学域)の2つの新専攻の学びへと発展的に吸収され、国際コミュニケーション専攻としては、より高度な英語運用能力や英語圏文化の修得に特化したカリキュラムを展開することになります。(2011年度の入学者が卒業する2014年度まで、現行カリキュラムは保証されます。)

立命館大学文学部としての教育目標や学生のニーズにより充実したかたちで対応するための、不断の検討、設計、実行を、今後も見守っていただきたいと念じています。



衣笠キャンパス東門のすぐ手前に洒落たPASTA & CAKEのお店があります。お店のシェフは、何と文学部東洋史学専攻の卒業生です。お昼のランチ時は常に満席で、味に定評のあるお店へ校友会事務局スタッフがインタビューをしてまいりました。

◆確か、2006年頃からお店をご利用させていただいていますが、お店がオープンしたのはいつ頃ですか。

オープンしたのは2006年2月です。たまたまこの付近を散歩していて、空テナントの広告が目に入り、ちょうど大学付近でお店を開きたいと探していたのでこの場所に決めました。

◆なぜ今のお仕事をされることに？

東南アジアに興味があり、東洋史を専攻しました。学生時代、何度か東南アジアを貧乏旅行で訪れ、卒業後もまとまった休みが取れ、旅行できる仕事に就きたかった。僕らの学生時代は、「就職氷河期」で、なかなか希望した就職先が見つからない時代。3回生の頃、自分で選べないのも癪に障るし、自分で何かやってみよう!と思うようになり、卒業したら自分の店を開きたいと思うようになりました。

◆パスタ料理は本場イタリアを彷彿させる美味しさですが実は、まだイタリアは行ったことがないのです。卒業後、小

川珈琲でアルバイトをしていましたが、料理は、まったくの独学です。料理本を何冊も見てもアイデアを拾い試作しました。もともと食べることは好きですが、特にパスタ料理が好きというわけでもありません。店を経営するという点では、「生計を立てられる=つぶれない店」という視点で今の店になりました。「美味しい物を食べたい」という客層をターゲットにメニューを考えて素材にもこだわっています。

◆お店の内装も可愛いアットホームな雰囲気ですが内装は流行を意識して自分でイメージして決めています。ペンキを自分で塗ったり、手作りの家具も多いです。店を持って思ったのですが、店主とは雑用ができないとやっていけない。結局なんでもできないといけないのだと。大学の隣でやっている店なので、夏休み、春休みはまとまった休暇をとります。その期間に料理のアイデアを練ったり、内装を変えたりしますね。

◆デザートのカッキーやプディング、クッキーなども手作りです。美味しいですね

すべて妻の手作りです。短大を卒業後、専門学校で栄養士の資格を取り、彼女も独学です。

◆文学部の学生へのメッセージ

若いうちに、どんどん海外へ出てほしいですね。日本の外に出てみて、はじめて日本の良い面、悪い面が見えてきますから。また、社会にでる前の4年間は、自分に何ができるか、試す意味でも、いろいろなことに取り組んでほしい。私自身、学生時代は遊んでばかりでしたが、今振り返ると、遊びや海外旅行を通して様々な文化や人々に触れながら多くのことを学び、感性を磨いてきたように思います。

◆お忙しい中、お話を聞かせていただきありがとうございます。こちらこそ、文学部校友会報に載せていただくこと大変うれしく思います。卒業生の皆さん、お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。

トッキーの穴蔵 〒603-8341 京都府京都市北区小松原北町69-15 1F
立命館大学東門徒歩5分 TEL 075-467-3030
定休日 日曜日



私が本学文学部日本史学専攻に入学したのは1981年、衣笠キャンパスへの一拠点化が完了した直後であった。当時まだ国際関係学部や政策科学部はなかったが、BK Cキャンパスもなかったので、経済・経営の両学部と理工学部も衣笠に同居していた。ためにキャンパスはかなり手狭ではあったが、その分学生の熱気にあふれていたように思う。

ただ私の所属する日本史学専攻は、他の文学部の諸専攻と同様に、1学年が現在の4クラスではなく1クラスであったため、同一回生全員の顔と名前を覚えるのはたやすく、また専門分野を超えて専攻の先生方（入学時は日本史学科専任の先生は5人であった）や先輩との距離も近かった。当時は文学部各専攻の共同研究室も大部分は清心館の3階にあったほか、院生の共同研究室も各専攻ごとに分割されていて2階にあった。学部学生時代は学部共研には余り出入りしなかったが、大学院進学後は院生共研でよく同級生や先輩方と議論をした。大学当局から火気の使用を公認されていたのかどうかは知らないが、夜はよく鍋を囲み皆で口角泡を飛ばしていた。今は文学部長の要職に泰然と収まっている桂島宣弘先生なども当時は他大学から出講している若手非常勤講師であり、配下の院生を引き連れてよくその輪に加わっていた。氏がその場で「自分はひとたび事あらば、ラテンアメリカで銃を持って戦う」などと怪気炎を吐いていた当時を思い起こせば、懐旧の念を押さえがたい。



▲大学院「古文書学」の授業で杉橋先生とともに（1985年）

当時は教員・学生を取り囲む雰囲気も牧歌的なところがあった。衣笠食堂という清和会が運営していた食堂が清心門のすぐ外にあって、生協と廉価を競っていたほか、昼間からアルコールが飲めた。ビールを飲んでから授業に出るといった学生も居たように記憶するが、特に先生方に咎められたようなことはあまり聞かなかった。また、大学院の授業の運営などは特に牧歌的であり、事務の担当係の人が「〇〇先生の授業は授業時間に連絡に行っても教室はもぬけの殻や。自分らで勝手に時間決めて別の場所でやってはる。」などどほやいているのを耳にしたりもした。院生の人数が少なかったということもあろうが、教員と院生の接触する時間が日常的に多かったために、あえて授業という制度化された接触の機会を厳格に設ける必要性を感じなかったのかも知れない。



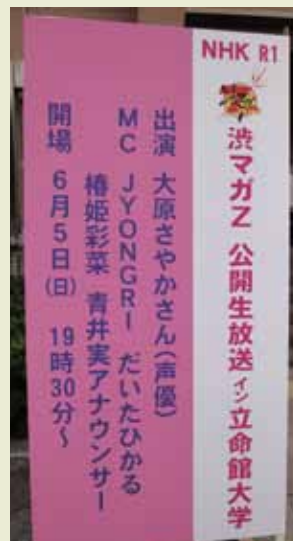
▲学部卒業式後の謝恩会にて（1985年）

人文科学研究所などが主催する研究会も定例の金曜日3時以降によく開催されており、その場で学内外の先生方と知り合う機会も多かった。そうした場においては普段教壇の上からの講義を拝聴する著名な先生方も、隣席に集う研究者であった。能天気な私はそれら各分野の代表者と同席しただけで、憧憬とともに、あたかも自分も一人前の研究者の驥尾に連なったような錯覚を抱いたりしたものであるが、そうした錯覚が案外研究を進める上での力になっていたように思う。

今の大学の中に、学生にそうした錯覚をあたえる「スキ間」は、ほとんど存在しない。

立命館から全国に公開生放送

言語コミュニケーションプログラム
朝尾 幸次郎 教授



「この大きな拍手でお気づきでしょう。今日はいつものようにスタジオからの放送ではありません。京都、立命館大学からの公開生放送です」青井実アナウンサーの高揚した声で番組は始まりました。日曜日の夜8時5分から10時55分までの長尺番組、NHKラジオ第一放送「放送マガZ」です。

発足2年目で快挙

この企画・制作を行ったのが言語コミュニケーションプログラムです。言語コミュニケーションプログラムは、話す・書く「ことばの実践」を目標に掲げ、2009年度に新設された新しい専攻です。将来、放送界、演劇界、教育界で活躍する人々を送り出すことをめざしています。

「放送マガZ」は若者、とりわけ大学生を対象に放送されている日曜日、夜のメイン番組です。この番組から企画・制作・出演の打診があったのが昨年12月。放送は6月5日(日)でした。この半年間、教員と学生で企画会議、リハーサルを繰り返し、実現したものです。

笑いと涙の企画・演出 番組のオープニングは「クイズ、京ことば」。京都からの生放送ということで、京都らしさを打ち出した企画です。次は「生協の森田さん」。「放送マガZ」のコーナーのひとつ、「生協の白石さん」をもとにした企画です。諒友館食堂の店長、森田さんが学生からの質問に掲示板で答えておられる「ひとことカード」をテーマにしました。ふたつの企画とも大爆笑で始まり、会場は一気に高

揚した雰囲気につつまれました。その後はラジオドラマ「キミに届け」。立命館のキャンパスを舞台にした青春ドラマです。

番組の締めくくりは「《ありがとう》を伝えたくて」。「ありがとう」と言いたいけれど、日頃なかなか言えない相手に手紙を書き、読み上げて伝えようというものです。留学生はアメリカの家族に、青森県から来ている学生は故郷の両親にあてた手紙を読みあげました。実は青森県出身の学生のお母さんからはあらかじめ返事を書いて頂き、録音を用意していました。録音を流すと、読み上げた学生も以学館ホールいっぱいの聴衆も涙をこらえきれませんでした。笑いで始まり、涙でしめくくった番組になりました。

放送直後から大きな反響 放送直後から出演した学生たちの携帯電話には出身校の先生や友達からひっきりなしに連絡が入りました。4日後の朝日新聞には「生協の森田さん」という大きな記事が掲載されました。「放送マガZ」を聞かれた朝日新聞の記者の方が翌日、森田さんにインタビューされ、くわしい記事にされたものです。思わぬところで多くのみなさんに聞いていただいていたことを知りました。



▲放送終了後、青井実アナウンサーと制作班全員で記念写真

立命館大学名誉教授・文学部校友会会長

西川富雄先生を偲ぶ会

2010年10月2日(土)



立命館大学名誉教授 西川富雄先生を偲ぶ会が2010年10月2日(土)に立命館大学末川記念会館において執り行われた。これは、昨年7月7日に逝去された故西川富雄名誉教授の立命館大学における功績を称えて、哲学専攻が主催となって開催されたものである。



▲岩井忠熊名誉教授



▲桂島宣弘文学部長



▲西川成子氏

「偲ぶ会」は、谷徹哲学専攻主任より開会の辞が述べられた後、参列者の黙祷に始まり、桂島宣弘文学部長より、お別れの言葉が述べられた。続いて、在りし日の西川先生のお姿を偲ぶVTRとして「ある哲学教師の50年」を上映し、会場の来場者と共に西川先生の足跡を映像でたどった。最後に、お集まり頂いた参列者各位に対し、西川成子氏から謝辞の挨拶が行われた。会場には120名をこえる参列者が集まり、故人にお別れを告げた。

専攻同窓会の開催報告

立命館大学哲学同窓会第51回定期総会

2011年10月1日(土) アークホテル京都3階「華の間」におきまして、第51回哲学同窓会の定期総会が行われました。

昨年の第50回記念総会で役員改選が行われ、本年は新体制で初めての総会となりました。また同専攻の服部健二教授、日下部吉信教授が年度末でご退職される年でもあり、日下部吉信教授から「昭和40年代の立命館哲学」との演題でご講演いただきました。

西村清次学校法人立命館元理事長はじめ30名余の同窓会員の参加があり、懇親会では、学生時代の思い出や近況報告、また亡き西川富雄先生の思い出話に花が咲き、和やかな雰囲気のうちにお開きとなりました。

立命館大学地理学同窓会

2011年度 エクスカーション

日 時 2011年11月26日(土)午前9時50分

内 容 JR円町駅→JR花園駅→嵐電天神川駅→嵐電帷子ノ辻駅→JR太秦駅(約2時間程度)

2011年度 同窓会総会・懇親会

日 時 2011年11月26日(土)

総 会18時00分より

懇親会18時30分より

会 場 京都タワーホテル(JR京都駅前)